

やさしさがつまった木箱

奈良県 耳成南小学校 五年

村上 駿太郎

あれは 1 年ほど前、とつぜんの強い雨だった。妹をだっこしていた母とぼくは、カサを持っていなかったので駅からの帰り道をいそいでいた。すると、一台の自動車がぼくたちのとなりに止まり、中からおばさんが、

「これ、さして帰り。」

と言って、カサをわたしてくれた。そして、おばさんはそのまま行ってしまった。

「お礼も言いたいし、カサも返したいけれど、どなたかわからないね。」

と母は言った。ぼくは、ずぶぬれにならずにすんで助かった、やさしい人がいるのだな、と思った。

ところで、ぼくの家近くには耳成山（みみなしやま）がある。^{やまとさんざん}大和三山の一つで、140メートルほどの高さなので、遠足で山に登ることもある。山すそがなく、まん丸い形から、余分なところ（耳）がない山という名前の由来があるらしい。

その耳成山のそばの通り道に、木でできた小さな箱のようなものが設置されている。そこには、『にわか雨のときは、どなた様もこのカサをご自由にお使いください』と書かれてあり、小さいものから大きいものまで、いろいろな色のカサが入っている。ぼくと同じように、にわか雨にあって困ってしまう人のために、だれかがこのカサ入れを作り、だれかがカサを置いていくのだな、と思った。

それからは、ぼくがその道を通るときは、いつもカサ入れをのぞいてみるようにして、置いてあるカサの種類が変わっていたり、カサの数も増えたり減ったりしている。だから、いろいろな人がこのカサを使っているのだなと、そんな観察をすることがぼくの中での楽しみの一つにもなっている。このカサをじっさいに使ったり、置いていったりする人を見たことはないけれど、どんな人なのだろうと想像するのもまた楽しい。

顔は見えないけれど、だれかのやさしさに困っただれかが助けられ、そのだれかが「ありがとう」という気持ちでカサを返すこともあるだろうし、また別のだれかのことを思いやって、カサを置いていくこともあるのだろう。このカサ入れは、そんな思いやりと感謝の気持ちを人から人へつなげて広げていく「やさしさがつまった箱」のようで、とてもいい仕組みだな、とぼくは思っている。

今日もぼくは、耳成山公園に遊びに行くついでに、遠回りをして、そのカサ入れを観察しにいった。カサは前より少し減っているように思えた。ただ、いつもとちがうのは、今日は観察だけではないことだ。ぼくのお気に入りだったけれど小さくなってしまったカサと、返せずにいたおばさんから貸してもらったカサを持ってきたので、それらを置いていくことにした。

だれかが使ってくれるといいな。